

アリストテレス『デ・アニマ』における感覚論

―「結合体」論との関わりの説明―

長島 智子

本論文は、アリストテレスの『デ・アニマ』（魂について）(1)の内容が半分以上感覚論である理由を明らかにすることを指すものである。

論証の仕方は、先ず第1章で、「共通感覚」という概念の内容を明らかにする。本概念は彼の魂論に重要な役割を果たしていると考えられる。本概念を明らかにするには『デ・アニマ』に限った議論では不十分であり、『自然学小論集』を含めた解釈が必要である。結論として、「共通感覚」とは、感覚の連動的な統括的能力であることを述べる。次に第2章で、心臓に魂の座を措いたアリストテレスの議論に着目し、魂、感覚、生命、心臓がどのように関連付けられているかを整理する。その結果、心臓がすべての感覚の中核であるとされていること、「感覚する」ということと「生きている」ということをアリストテレスが、極めて近い概念として捉えられていることが明確になる。最後に結論部第3章として、第1章と第2章で得られた結果から、生物を「質料」＋「形相」の「結合体」と考える彼の魂論を検討してゆき、『デ・アニマ』においてアリストテレスが感覚論に比重を

置いているのは、彼の哲学的立場を反映したものであり、その全ての議論が整合性を持っていることを論証する。

第1章 共通感覚

第1章の目的は、アリストテレスの「共通感覚」とは、感覚の統括的能力を示しているということを論証することにある。考察にあたっては、これまでの「共通感覚」に関する研究史を活かしながら行う。

方法は以下の順である。先ず、第2巻6章をとりあげ、『デ・アニマ』において「共通感覚」とは何を指すのかをまとめる。次に、この第2巻6章で出された「共通感覚」対象Vの感覚のみを「共通感覚」であると規定できない理由を、解釈の分かれている第3巻1章の冒頭文を手掛かりに明らかにする。その結果、2つの解釈の生じる原因は、従来の研究で指摘されているように、「共通感覚」という概念を『自然学小論集』も含め広義に捉えている点にあることが解る(2)。そこで、『自然学小論集』と『デ・アニマ』を対応させながら、「共通感覚」という概念を双方から整理する。これにより、アリストテレスが言いたかったのは、複数のバラバラな感覚がひとつのものとして働くことによる感覚の統括的な能力であることを確認する。

先ず、『デ・アニマ』における「共通感覚」は、これまでの研究で指摘があるように

* Ⅷ「共通感覚」対象Vを感じる感覚である

* Ⅷ「共通感覚」対象Vを感じる能力である

とする二つの違った解釈がある。この解釈の相違の原因を追求するために、初めに行うこととして、『デ・アニマ』第2巻6章の感覚対象について論じられている箇所をとりあげる。アリストテレスによってそこで挙げられ

た3つの感覚対象は感覚の仕方の違いから大きく2つに区別されている。

△表1▽『デ・アニマ』内における感覚対象の分類 (418a8ff.)

直接的感覚対象 <i>καθ' αὐτὰ/direct</i>
1 「固有の感覚」対象 例 色にとつての視覚、音にとつての聴覚、味にとつての味覚等 直接的に感覚できて、各感覚独自の感覚対象に対応しているもの 2 「全感覚共通」の対象 例 大きさ・形態・数・運動等 ↓ 「共通感覚」 直接的に感覚できて、全感覚（視覚や触覚など）に共通して感覚できる対象
付帯的感覚対象 <i>κατὰ συγγενητός/indirect</i> 3 「偶然付帯的感覚」対象 例 「白いものをみてディアレスの息子」と、思うような場合 感覚対象から、直接受けた白という色に、偶然に付帯しているもの

右の表で解るように、大きさ・形態・数・運動等の「全ての感覚に共通して捉えられる対象 *καθ' αὐτὰ*」は、直接的感覚対象として分類されている（右△表1▽の2△「全感覚共通」の対象▽を参照）。

しかし、この△「全感覚共通」の対象▽に対する感覚のみが「共通感覚」であるとは言いきれない。その理由を、第3巻1章冒頭文の2通りの解釈をひいて説明する。

アリストテレスは、第3巻1章で、五感に対応する感覚器官以外の感覚器官を我々が持ち得ないことを主張している。しかし、それを説明して行く際の冒頭文“ἀλλὰ μὴν οὐδὲ τῶν κοινῶν οἴον τεῖναι αἰσθητήριον τῶν ἰδίου, ὡν ἐκαστὴ αἰσθηθεὶ αἰσθανόμεθα κατὰ συμβεβηκός, οἴον κινήσεως, ὀρασεως, σχήματος, μετέθου, ἀριθμοῦ, ἐνός” (425a14ff.) は、次に述べるように2通りの訳がある。『デ・アニマ』だけで解釈する△訳1▽と、『自然学小論集』も含め解釈する△訳2▽である。

425a14をめぐる2つの解釈

△訳1▽ [Themistius, J. Toricot, C. Kahn等の解釈]

「実際に、変化、静止、形態、大きさ、数、1のような、共通なものを、個々の感覚によって我々が付带的に、(κατὰ συμβεβηκός ≡ indirect) 感覚する(ことになる)ような固有の感覚器官が存在するというようなことは決してあり得ない」

△訳2▽ [Ross, Hicks等の解釈]

「実際に、変化、静止、形態、大きさ、数、1のような、共通な感覚対象のための固有器官はありえず、共通の対象を我々はそれぞれの感覚によって付随的に、(κατὰ συμβεβηκός ≡ incidentally) 感覚する」

右に示されたように、双方の訳の、相違点は、訳1が「共通感覚」対象を我々が付带的でなく感覚する、つまり直接的に感覚すると読むのに対し、訳2は反対に付带的に付随的に感覚すると読む点にある。「共通感覚」対

象のための固有な感覚器官はないという点では一致している。相違のポイントは *katà syμβeβhkos* の訳し方に見出される。

△訳1▽は「共通感覚」を、直接的 (*direct*) に感覚するものとして扱っている。これは *katà syμβeβhkos* を先に見た第2巻6章の感覚対象の分類△表1▽の *direct/indirect* (直接的/付带的) に照らした読み方である。そうなるも当然「共通感覚」対象の感覚は付带的ではない＝直接的であると解釈するのが妥当である。これに対し△訳2▽は、個々の感覚に対して、付随して生じる (*incidentally*) と解釈している(3)。これは *katà syμβeβhkos* の解釈を、△表1▽の感覚対象の分類にあてはめていない。すなわち *katà syμβeβhkos* は *indirectly* (付随して) であって、*indirect* 付带的感覚対象ではない(4)。

次にこの△訳2▽の解釈が生じるのはなぜか。その原因が『自然学小論集』(*Parva Naturalia*, 以下PNと省略する)に見出せることを次に説明する。アリストテレスは『自然学小論集』で、「表象像は共通感覚 (*τῆς κοινῆς αἰσθητικῆς*) の二様態である。従ってそれは、間接的には理知の能力に属すけれども、自体的には第一感覚能力 (*τὸ πρῶτον αἰσθητικόν*) に属すのであろう」(PN450a13) とか、「各々の感覚には、一方では何か固有の感覚があり、また一方では共通の能力 (*κοινή δύναμις*) がある」(PN455a15) という表現で、五感覚(触覚・視覚・聴覚・嗅覚・味覚)の諸機能以外の働きを説明している。そこで、先ず『自然学小論集』においてこうした表現によって語られている働きの内容を分類する。更に、整理された様々な働きに対応する議論を、『デ・アニマ』から拾集し、双方をまとめると以下のようなになる(5)。

△表2▽

『自然学小論集』

『テ・アニマ』

1	△表1▽における「全感覚共通」の対象のための感覚 (例 「大きさ・形態・数・運動」などを感覚)	442b4ff.	418a10ff.
2	偶然付帯的感覚対象を感覚する働き (例 「白いものを砂糖／ディアレスの息子」)	449a5ff.	418a9ff.
3	感覚相互の同時付帯的感覚 (例 「胆汁が苦く、黄色い」)	455a15ff.	425a30ff.
4	感覚していることを感覚する働き	455a15ff.	425b1ff.
5	甘／辛の区別や、白／黒の区別に加えて、甘／白の区別	455a15ff.	426b9ff.
6	覚醒と睡眠が「共通感覚」の様態であること	455a23ff.	417a10ff.

右の対応表から解るように、『自然学小論集』で語られている機能は、全て『テ・アニマ』の議論にも全く一致している。そして、こうした1〜6の感覚の働きをアリストテレスは『自然学小論集』では、「共通感覚」「共通の能力」「第一感覚能力」という表現で説明している。

この結果言える重要なことは、アリストテレスが『テ・アニマ』『自然学小論集』の両方で、1〜6のような五感覚それぞれの働き以外の機能に着目し、更にこうした複数感覚間での一体性をもった統括的な能力を、「共通感覚」「共通の能力」「第一感覚能力」と表現し、感覚の働きとして語っているということである。

最後に、アリストテレスにとつてこうした能力は、あくまでも感覚の働きであり、思惟や理知の働きではないことを他の観点からも確認する。彼が着目した上記ような感覚の統一的な能力は、現代的に言えば、意識や脳の働きに近いものである。つまり感覚の働きを超えている。だが、これらの働きを即、意識や脳に置き換えることは出来ない。その理由は『自然学小論集』でアリストテレスが、感覚とは「現在のことだけを知る」ものであると述べ、「表象」や「記憶」は感覚から由来して起きるものとして捉えているからである (PN449a13ff)。また、『デ・アニマ』におけるアリストテレスの感覚論は、現実態である感覚対象の分類から始まっており、全ての感覚は感覚対象に起因して、感覚器官を通じて起きてくる能力としてアリストテレスが扱っているからである。以上の考察によって第1章の結論として言えることは、アリストテレスが、「共通感覚」という概念で、感覚の一体的な統括的能力に着目しており、それをあくまでも感覚の働きとして語っているということである。

第2章 魂の座

第2章では、魂の座をめぐる議論について述べる。ここではアリストテレスが魂、感覚、生命、心臓を関連付けて捉えていることを明らかにする。更に本章は、彼が『デ・アニマ』のなかで感覚に比重をおいた理由を探る手掛かりとなるものである。考察の結果、彼は魂を「生きる原動力」として捉え、心臓に感覚器官の中枢を描いていることが明らかになる。更に、アリストテレスは「生きていること」と「感覚すること」を密接に関連付けて捉えているということも明確になるはずである。

まず初めに、魂の座に関わるアリストテレスの議論を『デ・アニマ』およびその関連書(同時代に書かれたとされている書物)からも列挙し、まとめる。

・『デ・アニマ』における魂の座に関する議論

各感覚器官を説明していく第2巻に入り、特に聴覚について語られた第8章で、アリストテレスは声について説明している。そこでの議論から、動物の最初の呼吸器官は心臓であり、そこに魂がある、と、彼が考察していることがわかる(420b26ff.)。

・『自然学小論集』における魂の座に関する議論

彼は『自然学小論集』の「青年と老年について、生と死について」のなかで「有血動物においては魂の感覺能力の根源も心臓の内にあらねばならぬ」(469a5ff.)と、感覺能力の根源も心臓に措いている。更にそこで彼は、その理由を、有血動物は心臓から生じるからだとしている(468b29)。

次に、心臓と共通感覺の相関関係に言及している箇所からは、感覺能力の支配的部分が心臓にあり、心臓は全感覺器官の共通な感覺器官であると彼が考えていることが解る(469a10)。そして、「この部分「心臓」に生命があるとなれば、感覺の根源もまた必然的にそこにあらねばならない……」「生命ある身体であるというのは、それが感覺することが出来る限りにおいてだからである」(469a10)と論じている。こうした箇所は、生命と感覺を結びつけて捉えている彼の考えを明確にするものである。このようなアリストテレスにおける生命と感覺の密接な関連付けは、続く箇所「もし動物が、感覺的な魂を持つていることによつて」「それが動物である」と定義されるとすれば、有血動物においては必然的に魂の根源を心臓のうちに持つていなければならず……」(469b12) という論からも充分に読み取れる。

以上の箇所で言われていることを略記すると、次の通りである。

- ▽ 魂の感覺能力の座を心臓にしていること
- ▽ 心臓が最初に生じると考えていること

▽ 各感覚に対して支配的な立場にあるものは心臓であると考えていること

▽ 感覚、心臓、生命の三つの密接な関係に注目していること

▽ 有血動物において魂の根源は心臓である

▽ 自然学的見地から魂を考察しようとしている探究姿勢

・『動物運動論』における魂の座に関する議論

この作品では魂のはじまりを身体の中央部に描いていることや、それに伴い、感覚器官も中央部にあるのだというところがアリストテレスにとつて既に定説とされ扱われている(702b21)。こうしたことからアリストテレスが魂は心臓にあると確信をもって捉えているのが読み取れる。更に、呼吸(*psychē*)、心臓、魂の関係を語っている箇所では、3つを関連付け、呼吸の起源も心臓に描いている(703a9ff)。

・『動物発生論』における魂の座に関する議論

この著作では、アリストテレスが更にはっきりとした形で感覚の根源を心臓に描いていること、心臓が現代の医学の認識とは異なり、脳よりも先に形成されるとアリストテレスは考えていたことが解る(743b26)。更に、睡眠と覚醒について論じている箇所では「何故なら、生は感覚の故にとくに覚醒に属するからである。また、動物が感覚を有することは必然的であり、はじめて感覚が起った時、そのときにはじめて動物と言えるのである……」(778b32)と、ここでも生と感覚の密接な関係を述べている。アリストテレスにとつて、生と感覚は切り離せない重要な一組の概念であり、生≠感覚という彼の見解が一層明確になる。まとめて次に略記する。

▽ 諸感覚の根源は心臓にある

▽ 心臓が全身の中で最初に形成される

▽ 心臓付近の熱との対立関係から脳髄は形成される

▽ 頭の周りの部分は心臓の次に形成される

▽ 感覚を有するものⅡ動物

▽ 生非感覚

以上を整理すると、動物にとつて、先ず初めの呼吸器官Ⅱ心臓が最初に形成されるとアリストテレスが考えていること、次に、その心臓に、各感覚を支配する感覚器官の中枢を描いていることが解る。感覚機能が心臓にあるとするのは、感覚することが出来る限りにおいてこそ、生命ある身体である（『動物発生論』）と、アリストテレスが考えているからである（6）。このようにしてアリストテレスにとつて、感覚と生命は切り離せないものになっている。従つて必然的に、感覚の根源は、生命の源である心臓ということになる。アリストテレスは、動物とは「魂を持った物体」であることを、繰り返し主張している（7）。彼にとつて、「生きている」ということは、魂を持つことであり、感覚することである。魂は、「生きている」ことを実証するもので、それは感覚によつて可能になる。つまり、アリストテレスは魂を、「生きる原動力」として捉えていることが明確になる。こうした整理により魂を、「生きる原動力」として捉えたアリストテレスにとつて、身体を活かす機能を担つた心臓に、魂の座を描くことが必然であつたことが明らかになつた。

ここまでの考察で、明確になつた重要な点は、

(1) アリストテレスにとつて、「生きていること」は「感覚すること」であること

(2) 魂を「生きる原動力」と捉えるアリストテレスにとつては、自ずと感覚の中枢は、生きることを担つ

ている心臓に描かれること

以上の2点である。

先の第1章では、アリストテレスが、複数の感覚間の連動的な一体的統括能力に着目していること、そしてそ

れを「共通感覚・共通能力・第一感覺能力」という表現で、感覺として捉え、論じていることを明らかにした。本章に見られたように、心臓に全感覺器官の中樞を措くアリストテレスにとって、こうした「共通感覺」概念は、生命や魂と関わる重要な役割を果たしている(8)。

第3章 結合体

最後に結論部、第3章として、『デ・アニマ』においてアリストテレスが感覚論に比重をおいたのは、彼独自の「結合体」という概念に立脚した結果であるということを論証していく。先ず「結合体」の概念を『デ・アニマ』から整理し、考察する。その結果、生物と無生物とにおける相違点が見出せる。そしてその相違点は、生物がその質料に形相概念を既に含んでいることにある。次にこの論点を『形而上学』における、部分(質料)の説明中に全体(形相)の説明(働き＝概念)を含んでいるという論に照らして、明確にしていく。こうした考察の結果、感覺と「共通感覺」の関係も、実は部分と全体に対応したアリストテレス独自の「結合体」論に沿ったものであったことが解る。最終的に、以上で得られた結論を、アリストテレスの、魂を生物の「結合体」と考える魂の定義に照らすことで、彼の感覺論と「結合体」論は整合性を保っていることが明らかにになり、『デ・アニマ』における感覺論への偏りの根拠が解明される。

先ず、「結合体」(σύνολον/σύνθετον)という考えを、『デ・アニマ』における彼の論を基に明確にする。アリストテレスは、生きているものを、「形相」と「質料」の結びついた両者から成るもの、つまり「結合体」でなければならぬとしている(412a7ff, 414a15)⑨。「形相」とは、『デ・アニマ』における説明を借りれば「それによって、コレコレのものごと(う)ことが既に言われるもの」(412a8)であると説明されているが、コレコ

レのものと言うのは、いわば本質、概念、機能の規定、定義であると言える。従って形相とは概念規定できるものを指すことになる。これに対して質料とは「コレコレのものであるとはそれ自体では言えないもの」(412a7)と説明される。それだけでは概念規定できない、ものの素材、構成要素、部分と考えられる。

次に、無生物と生物の具体例を挙げ、質料と形相を検討する。例えば無生物である斧の場合、斧の形相は「木を切るもの」と概念規定できる。これに対して斧の質料は素材である鉄や木であると言える。鉄や木は、斧としての本質や働きは持っていないため、それ自体では概念規定できないことになる。従ってこれらは質料である(10)。次に生物である人間の場合、人間の形相は「生きている」ということである。人間の質料は、構成要素である手や指や目であると言える。

次に無生物と生物の形相と質料の違いを取り上げる。例えば、人間の目、指、手といった部分は、生きている人間と同じように生きている。アリストテレスは、『デ・アニマ』で、「見る」機能のない目は、石の目とか絵に描いた目と同じで(412b22ff)、『それは目ではないと論じ、また『形而上学』においても、生きている手は、人間の部分ではないと説明する(1036B31)11)。また指に関して、死んだ指はただ「ユビ」と名前が同じものすぎないと論じている(1035b23)。このような論から、人間の部分である目、手、指は、全体の機能である「生きている」という概念規定が既に含まれていなければならないことが解る。形相と質料が結びついてしまっていると言つてよい。アリストテレスは『形而上学』において生物と同じ例として半円や鋭角について説明している。半円は円で、円と同じ丸くカーブしているという性質を持っている。部分の中に全体の説明が入っていると言える。鋭角も、直角より小さい角ということで部分の中に全体の説明が入っている(1035b9)。このように、生物や、円、鋭角などは、部分である質料に全体の形相の概念が既に含まれている「結合体」なのである(12)。「生きている手」と「生きている人間」という関係は質料も形相も同じ「生きている」という働きである。

つまり人間の手、目、指は、人間全体の「生きている」という働きを持つものである。アリストテレスはこうして、「質料」と「形相」はそれぞれに分けられないと考えているのである(1035a28)。

最後に、アリストテレスの魂の定義と結びつけて論及し、彼の魂論における感覚への偏りの根拠を明確にした。彼は、魂を生物の形相と定義している(13)。先の考察で明らかになったように、生物は質料に全体の形相概念が既に含まれている「結合体」であった。従って、全体の形相である魂と同じ機能は、構成要素(質料)にも含まれていなければならない。魂と同じ機能が、構成要素にならなければ、彼の「結合体」の概念は守れなくなる。感覚は、構成要素である手や目や指にもあり、全体にもある。しかし、それに対し、例えば思考(*Ornava*)や理性(*vogē*)といった言わば理知的能力は、手、目、指にはない。つまり全体にあつても構成要素に理知的働きはない。アリストテレスは、「身体と感覚は不可分なものであるが、理性は切り離されたものである」(429b3ff.)(14)と考えている。そうすると彼は、理知能力ではなく、全体と部分の双方にある感覚を魂の働きとして主に取り上げなければならない。そして、彼は「感覚することは生きることである」と結びつけていくことになるのである。

本論文第1章で、アリストテレスが、複数感覚の一体的な統括能力の働きに着目していること、更にそれを「共通感覚」「共通能力」「第一感覚能力」としてあくまでも、感覚の働きとして扱っていることを論証した。しかし、こうした言葉によって説明され、第1章で表示した1〜6の働きは、先にも指摘したように、本来感覚の範囲を超えるものであり、言わば理知等の働きとして考えられるものである。しかしながら、人間の手や目や指には理知的機能はない。つまり、全体も部分も同じ機能を持つ「結合体」の質料として扱えない。それに対し、部分としての各感覚と全体としての「共通感覚」の関係は、部分(質料)の中に、全体(形相)の働きが既に含まれている上、全体が単なる部分の集合ではなく、統括的な一体的役割を担うという彼の「結合体」論と十分一

致するものである(15)。そして心臓こそが、部分と全体に共通した機能である「感覚すること」と、「生きること」を可能にするのであるから、そこに、魂の座を措くのも彼にとつては当然の帰結となるのである。

結 び

本論文の考察によって明確になったのは以下のことである。

- 一、彼の形相—質料という概念は、全体—部分に対応できること
 - 二、部分と全体に共通の本質を持つ結合体として生物が把握されていること
 - 三、生物の本質的な機能のうち、全体にも部分にも共通に在るものとして感覚は着目され、特に複数感覚の統括的機能である「共通感覚」概念は、全体が単なる部分の集合ではなく、統括的な一体的役割を担うという彼の「結合体」論と一致しており、魂論において重要な要素になっていること
- 以上3つの結論から、アリストテレスが『デ・アニマ』において感覚論に比重をおいた魂論を展開することになったのは、質料と形相の「結合体」という彼独自の概念が強く反映された結果であり、彼にとつては充分に論理的一貫性を持つものであることが明らかになったと考える。

〔注〕

- (1) 本論文でラテン語の原題をそのまま使用したのは、以下の理由による。原典 *Opera Aristotelis* の *Psychologia* が元々多様な概念を含み、また日本語訳において、訳者各々の意図と、訳出された各々の時代背景の影響を受け、『心理学』『霊

魂論』[『靈魂について』]「心とは何か」と変化している。最新訳の「心」では、プラトンやそれ以前の *psyche* 観が十分反映しきれないという危惧から、また「靈魂」という訳では現代語のイメージでは身体と遊離した感が強すぎる懸念から、これら両者の訳は採らなかつた。また田中美知太郎がプラトンの『国家』で *psyche* にあてた「心魂」という訳は、両者の中間に位置し概念的には近いと思うが、一般的にあまり耳慣れていないため、本論文は *psyche* の訳を「魂」と現段階はすることにす。また、アリストテレスのみの *psyche* の訳としては、「生能」(土橋茂樹『理想』664) という訳が最も彼自身の概念が反映されていると考える。しかし、第1巻での議論(先人達の *psyche* 論)にまでは当てはめにくいため、これも採らなかつた。

(2) 永井龍男「アリストテレスの共通感覚」『富山大学人文文学紀要』19(2、3頁)においては、広義と狭義という区別で捉えられている。

(3) Aristotle, *De Anima*, edited with introduction and commentary by Sir David Ross, Oxford, 1961, p. 33.

(4) C. Kahn, *Sensation and Consciousness in Aristotle's Psychology*, p. 9, note 24 に引かれ、C. Kahn は続く 425a24~28 や第2巻6章の分類にも照らすべきだとし、訳2の間違いを指摘している。しかしだからと言って、C. Kahn が言うようにアリストテレスが拒絶すべきだとし、訳2の間違いを指摘している。しかしだからと言って、これによって「共通感覚」対象が感覚されるのだとは即言いきれない。つまり「共通感覚」対象の感覚はここでアリストテレスによって説明されているように複数感覚の一体的連動作用によるもので、これはC. Kahnの言うthe special senses とならないので、訳2の解釈は、間違いであるとは言いきれないと著者は考える。

(5) 本論文においてのアリストテレスの共通感覚は Ross と同様に *De An.* と *PN* をまとめて扱いその働きは表記の6つであるとする論を基本的には採用している (Ross は2を2に含めて扱っているため5つである)。しかしその内容には Kahn 同様、異論がある。反論点は Ross が、

- 1、1の∧共通感覚対象∨を感覚する働きに、時間の概念を導入していること
- 2、共通感覚対象は固有感覚に付帯している⇨付随して生じると位置付けていることである。以下反論の根拠を述べる。時間の概念はPNVの記憶についての議論の中で論じられているものであるが、Rossはこの時間も運動(変化)に関わるので大きさまや形態等と並ぶ共通感覚対象としていのである。これはRossがアリストテレスの共通感覚対象の設定にプラトンとの類似性を見出していることと(Ross前掲書p.34)、その感覚が付帯的、付随的であると解釈していることに由来する。「共通なもの」の設定におけるプラトンとの類似性は同意できるが、その扱いはRossも言及している通りプラトンが思量/勘考(*συλλογισμός*) [Theaetetus: 186a2]としているのに対しアリストテレスは感覚として扱っていることから両者を正確に分けて考えるべきである。本論文では、この時間の概念はあくまでもKahnが主張するように、記憶や想起に関わって感覚の共通の能力に「派生的(outgrowths)」の生じるものであるため、1に組み込むことには賛成しがたい。また共通感覚対象を付随的とするRossに意見に対しては、『デ・アニマ』のみ考える限りは、共通感覚対象は第2巻6章からの流れや第3巻1章の内容を重視すべきであると考え、∧訳1∨の「直接的感覚対象」であることを主張する。従って分類において厳密には、1の内容はRossと異なり、それはDe An.で論じられている共通感覚対象のための感覚のみで、それらは第2巻6章で直接的感覚対象に分類されたものであるとする(C. Kahn 前掲論文 pp. 16, 17 参照)。
- (6) 「感覚することが出来る限りに於いて生命ある身体である」とする考えは、PNV469a10でも述べられている。
- (7) 「動物は魂を持った物体である」(De An. 434b12' cf. GA738b19 al.)
- (8) 魂の座をめぐる議論だけを取り上げれば、プラトン、ヒポクラテス、アリストテレスを経て、ガレノスの時代に成熟したと言える。ガレノスは身体の能力を三分割して考え、生命的諸能力を心臓に、神経的諸能力を脳に、栄養的諸能力を肝臓に措いている。しかし、イブン・スィナーはアリストテレスの方法を採用して心臓優位を復活させてい

る。アリストテレスに起源を有する自然科学的な原因論的思考はヒポクラテスやガレノスによって、病気のための病因論的思考となり、イブン・スィナーに受け継がれている。また、ストア派においても、魂の座を心臓に措くこと、呼吸と魂の関係といった点などで、アリストテレスの論はかなり影響を与えている（五十嵐一著『東方の医と知 イブン・スィナー研究』講談社、伊東俊太郎責任編集『イブン・スィナー』朝日出版社、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシヤ哲学者列伝 中』7巻1章、岩波文庫、A.A. Long, *Hellenistic Philosophy, Stoics, Epicureans, Sceptics*, Univ. of California Press, Berkeley, 1974 参照）

(9) 厳密には『デ・アニマ』において「結合体」という単語は出てこない。しかし、『形而上学』Z巻10章他における議論に照らしても、『デ・アニマ』の質料＋形相を「結合体」とすることに問題はないと筆者は考える。

(10) *De An.* (412b14ff) における斧と目の例は形相＝本質を魂とすることに基づいて、アリストテレスによって取り上げられた例であると解釈する。本質（斧にとつてのハ切ること、目にとつてのハ見ること）を伴わないそれぞれは単なる同音異義なもの (*ὁμώνυμοι*) にすぎず、石の目となんら変わらないことを強調していると読む。J.A. Ackrill *Aristotle's Definitions of psuche in the Articles on Aristotle*, edited by Jonathan Barnes & Richard Sorabji, London Duckworth 1979, 三浦洋「生命の定義と質料形相論」『哲学』49号、浜岡剛「質料としての生きていくる身体——アリストテレス『デ・アニマ』における質料——形相理論」西洋古典学研究43 p. 65ffなどを参照した。

(11) この説明における「既に」はアリストテレスの形相の説明における「既に」(*ἤδη*) に対応すると筆者は現在のところ考えているが、『形而上学』の観点からのより徹底的な研究が更に必要である。

(12) ここで、無生物は「結合体」ではないということを意味しているのではない。アリストテレスは *De An.* において、生物は「質料＋形相＝結合体」であることを強調している。無生物の「結合体」に対して、いわば強い「結合体」とも考えられる。また、生物はその起動因を自らのうちに持ち、無生物は起動因として第三者を要求するという点

で、同じ「結合体」でも生物と無生物においては違いがあるとアリストテレスは一方で述べている (*Meta. H4, 6*)。 (起動的見解は金子義彦「全体と部分の関わりについて——アリストテレスの実体論の観点から『アカデミア』6」南山大学、藤井義夫『アリストテレス研究——存在と認識の諸問題』岩波書店 昭和15年、p. 335ff.等を参照。この問題は『形而上学』側からと、また、*De An.* 第3巻5章における能動理性との関わりからも更に深く研究する余地が十分あるが、本論文では生物と無生物の「結合体」の差異がアリストテレスによって論じられていることのみを確認するにとどめる。

- (13) *De An.* 412a19 「魂とは、生きる能力を可能的に持っている自然物体(身体)の形相という意味で実体である」
 (14) *De An.* 429b3ff. 本論文においては、上掲箇所のはか430a17や429b3と共にアリストテレスが理性を感覚とは別ものとして論じている箇所に基づき研究を進めた。しかし、アリストテレスの理性の問題は *De An.* 第3巻5章における能動理性の問題も含め十分研究していく余地があると考えている。今後の課題としたい。

- (15) アリストテレスは、*Meta. Z* 巻10章で、全体—部分の議論をした上で、*Meta. Z* 巻16章において全体は部分の単なる集合体ではなく統一体として捉える考えを論じている。全体と部分のアリストテレスの議論については、前掲論文、金子義彦「全体と部分の関わりについて」を参照した。

* 本論文は、平成11年度卒業論文として提出したものに基づく。平成12年度春季学習院哲学会研究発表会において発表したものに更に検討加筆を加えたものである。

参考文献

テュムスナーおよび翻訳

- Aristotle, *De Anima*, with translation, introduction and note by R.D. Hicks, Cambridge, 1907.
- Aristotle's *De Anima*, with the commentary of St. Thomas Aquinas, Routledge and Kegan Paul, 1951.
- Aristotle *De Anima*, edited with introduction and commentary by Sir David Ross, Oxford, 1961.
- On The Soul, tr. by J.A. Smith, (1931): in the *The complete works of Aristotle* ed. by J. Barnes I, Princeton University Press, 1984.
- Aristotle, *De L' Ame*, Traduction nouvelle et Notes par J. Tricot, Paris, 1934.
- Aristotle's *De Anima*, by D.W. Hamlyn, Clarendon Aristotle Series, Oxford, 1977.
- Aristotle, *Parva Naturalia*, ed. by Sir David Ross, Oxford, 1955.
- Aristotle, *Generation of animals*, by A.L. Peck, The Loeb Classical Library, 1953.
- Aristotle, *Parts of animals*, by F.H.A. Marshall, *Movement of animals; Progression fo animals*, by E.S. The Loeb Classical Library, 1945.
- Aristotle, *Metaphysics*, by Sir David Ross, Oxford, 1924, vols 1, 2.
- 高橋長太郎 『心理学』河出書房、昭和23年
- 山本 光雄 『アリストテレス全集6 靈魂論』岩波書店、1968
- 村治 能就 『世界の大思想2 靈魂について』河出書房新社、昭和41年
- 桑子 敏雄 『心とは何か』講談社学術文庫、1999

- 副島 民雄 『アリストテレス全集 6 自然学小論集』岩波書店、1968
 島崎 三郎 『アリストテレス全集 8 動物運動論：動物発生論』岩波書店、1969
 論文

Aristotle *De Anima*, ed. with introduction and commentary by Sir David Ross, Oxford, 1961.

Charles H. Kahn, *Sensation and Consciousness in Aristotle's Psychology: in the Articles on Aristotle*, ed. by J. Barnes, M. Schofield & R. Sorabji, Duckworth, London, 1979.

J.A. Ackrill, *Aristotle's Definition of psyche: in the Articles on Aristotle*, ed. by J. Barnes, M. Schofield & R. Sorabji, Duckworth, London, 1979.

Essay on Aristotle's De Anima, ed. by Martha C. Nussbaum, Oxford University Press, 1992.

A.A. Long, *Hellenistic Philosophy, Stoics, Epicureans & Sceptics*, Univ. of California Press Berkeley, 1974.

藤井 義夫 『アリストテレス研究——存在と認識の諸問題』岩波書店、昭和15年

金子 義彦 『全体と部分の関わりについて——アリストテレスの実体論の観点から』『アカデミア』、南山大学 67, 1998.

三浦 洋 『生命の定義と質料形相論』『哲学』49号、日本哲学会56回大会。

浜岡 剛 『質料としての生きてゐる身体』『西洋古典学研究』43, 1995.

浅野 檜英 『アリストテレスの感覚論』『東北大学教養部紀要』37, 1982.

永井 龍男 『共通感覚および共通感覚対象における共通性について』『富山大学人文学部紀要』19, 1993.

土橋 茂樹 『生のアスペクトと善く生きること——アリストテレス『エ・マニマ』を起点として』『理想』664, 2000.